

巻 頭 言

ラボラトリー・メソッドによる教育は従来のオーソドックスな知識重視型の教育や教育者からの一方的な文化継承型の教育の限界の中から生まれてきている。その教育の中心的な学習の場としてTグループが誕生してからもう40年を過ぎようとしている。その間グループ体験から直接学ぶことの強力なインパクトが全世界を駆け巡り1960年代には米国においては盛んに行われるようになった。それはヒューマンポテンシャル・ムーブメント（人間性回復運動）の流れと重なり、またカール・ロジャースが「今世紀が生み出した最も価値のある社会的発明」と絶賛し新しいグループアプローチの流れとしてエンカウンター・グループが盛んに行われるようになり、現在ではさまざまな種類のグループアプローチが生まれてきている。

1958年にTグループが初めてわが国に持ち込まれ、以後九州大学や立教大学を中心として研究・実践が行われ始めた。また、産業界でも指導者研修などにおいてTグループを中心にした体験学習が用いられるようになった。しかし、そのアプローチは非人間的で、人間を操作しようとする傾向が見られ、強烈的な情動体験のみが売物にされていた時があったようだ。当時の参加者の中にはセンシティビティ・トレーニング（ST）と聞くだけで一種の嫌悪反応を示す人もかなりいるとも言われている。

米国においては、現在もメイン州ベセルのNTL（National Training Laboratories）を中心にして今もなおさまざまな種類のトレーニングが行われている。ところが、わが国においてはその教育のユニークさから一時期かなり盛んに研究・教育実践が行われたものの、そのブームはおさまったかのように見える。それはTグループが日本の風土にはマッチしなかったからだと簡単に結論が出せるだろうか。今日の社会において特に日本において学習者自身の直接体験から学ぶ教育の必要性が弱まってきているのであろうか。今日の非人間化の進む社会において自分自身の関係のあり方を問う教育の必要性がますます高まってきていると感じているのは私一人であらうか。今日、わが国においてTグループを中心としてラボラトリー・メソッドによる教育が元来目指しているものが何であるのかを再考する時期に来ているように感じられる。

そこで、ブームが去った背景には、Tグループ実践における教育観・人間観の問題があるのか、または教育方法論の問題があるのか、もう一度検討してみることが今回の特集のねらいである。

南山短期大学人間関係科の教育も、また当センターでのほとんどの研修もラボラトリー・メソッドによる教育観と方法論に根ざした人間を大切にする教育の実践の場を実現すべく努力してきている。ラボラトリー・メソッドによる教育とは何か、またTグループを通して学習者が主体となって学ぶ教育環境を作るためには何が必要なのかなどを再考することはこれからの我々の教育実践にとっても有益になるであろう。また、体験学習による教育を実践しようと考えられている教育者の方々に対してなんらかの示唆を提供できれば幸である。

津 村 俊 充